



蜂熊山 金剛院 由緒

【宗派】高野山真言宗

摂津国第四十五番札所

【別名】蜂の寺

【本尊】薬師如来像

【開山】行基菩薩

【由緒】天平十年、行基菩薩が紫雲金光を見てこの地に来たところ牛頭天王が一老翁に化してこの世のものとは思われぬ珍菓を供し乍ら、この靈地に一寺建立を乞い、消え去ったという。これにより行基菩薩自ら薬師如来座像を刻み、本尊とし、放光山味舌寺と名付けた。その後、鎌倉時代の初頭、賊徒が此の地に蜂起したおり、官軍敗退し、これまでという時、当時薬師如来に祈念したところ、これに呼応するように、山内より郡蜂出現して勝利を得ることができた。その折戦死した蜂を埋め供養したのが、今も寺内に現存する「蜂塚」で、珍菓の味より名付けられた味舌寺はこれより、寺名を蜂熊山(霊蜂山)蜂前寺金剛院と改められた。その後、戦火に焼かれた伽藍は、天正十年十月三日織田有楽斎所領の折、再建されたと上梁文にある。寛文三年には二代領主織田豊前守長定殿が宿願成就により護摩堂を再建され、七代目領主織田丹後守輔宣侯の代によくやく住古の面影を取り戻したということである。近年かつての寺門の「中内」と呼ばれている土地の旧家から仁王の頭部残欠が発見され、その鋭いノミの跡に盛時の面影を偲ぶことが出来る。